

毎月1回25日発行

第3種郵便物認可(昭和35年7月26日) ①

# 山と博物館

第 6 卷 第 8 号

1961年7月25日



鹿 島 槍 方 岳

太田忠雄氏

大町山岳博物館

## 霧の大キレット

——ある高山蝶の思い出——

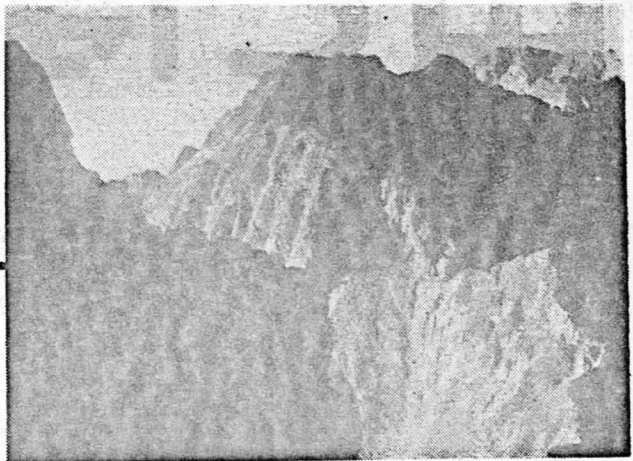
田淵行男

或年の8月末、私は当時高校生の長男穂高を伴い南岳にテントを運び上げ、一週間程あたりの撮影に専念したことがあった。そこは、険絶をもって鳴る槍・穂高の従走路が、いよいよその本領を發揮して大キレットをのそきこむように壮絶な断崖をそぎ落しているその突端である。地形はこの上もなく不安定で、無論水は得られず、その上風当りは滅法強いといった凡そキャンプサイトとしての必須条件の何一つ備わらない、いわば完全に失格の場所なのだがそこに、そうした幕営地の公式を無視させて余りあるとりえが一つだけ見出されたのである。それは、そこからの眺めで、とりわけ大キレットを隔て、見る北穂高の姿であった。朝は太陽が光の第一矢を放つその瞬間から、夕は最後の残暉を収めるそのまぎわまで、この岩の巨人に加えられる照明の変化は、私にはこの上なく素晴らしいものであった。それを気まゝに狙える撮影上の優越性に比べると、テント生活の多少の不便などものの数ではなかった。

とはいうものの、標高1万尺のそうした稜線の先端には、例え小さなテントでもすぐさま広げる余地のあろう筈はなかった。あちこちと思索詮策の末、ようやく馬背状の山稜が少し東に向きを変えていく辺りのハイマツの下陰に当たる所が心持ち傾斜をゆるめ、やがて再び目の屈かぬ奈落へ落ちこんでいるのを見出し、そのほんの僅かな巾の草付とハイマツの根に支えられた砂礫地を藪と定めた。直ちに、ピッケルを唯一の得物に整地にとりかかったが、これが思いの外難工事であった。そのうち、中岳の雪溪への水汲みから戻った息子と幾度か交代をくり返して、夕霧の立ちこめる頃、どうにか2人が身を横たえられる平地を作り上げテントを張った。

そうした幾日目かの或好天の朝、私共は北穂高を志して大キレットを下った。然し、いよいよ北穂の登りにさしかろうとする頃から、俄かに天候が変わって霧に包まれてしまった。飛弾側から押しよせる息のつまりそうな濃い霧は、あとからあとからと続いて、名にし負う飛弾泣きの難所の岩峰が私共の行手に墨絵のように浮かんで消えた。

どうどうと鳴るのは蒲田谷から突き上げる風が岩角に裂かれ、岩壁を伝う音であろうか。琮々と耳を打つのはハイマツの梢の風にさからう音であろうか。岩陰に戦くイワギキョウのつぶやきであろうか。前後を霧にとりまかれて視界を失った私共は、岩肌に浮かぶ白い目印しを



南岳より朝の北穂高を望む

必死に探し求めて黙々と足を運んで行った。

これは、そうした霧の大キレットの底での出来事であった。その時、私はふと摺んだ岩角に体重を托して身を引上げた。そこには小規模のテラス状の棚になって、ルートはその上の方で小さな突起を乗り越しているのである。ほんの一握り程の土壌が数本の小さなハイマツを育て、ヒメスゲやイワギキョウの草むらに乗せていた。私が身を引上げたとき、必然的にそのテラスの縁に顔をのせるような形になり、視線はいやでもまともにそのハイマツの根方へ注がれた。と、その時私はある異様な感じを受けた。それは、長年自然を眺めているうち、知らず知らず身につけた一種の感受性で、第六感とも、又第二の本能ともいえるものかも知れない。私がこれまでいろいろな野性動物の存在を確認する直前にいつでも感覚する予感と現実のいり交った感じである。

そうした体験から、私は素晴らしい野性動物の見出される所には、明確にある種の雰囲気と、快よい着落きと調和の保たれていることを確めている。この時も無論その例外ではなかった。この事は、野性の側からいうと、その身につけた本能の力でいともたやすくその場を選び定めるのであろうが、人間の鈍い感覚ではそれを見破ることはかなりの体験を要するようである。

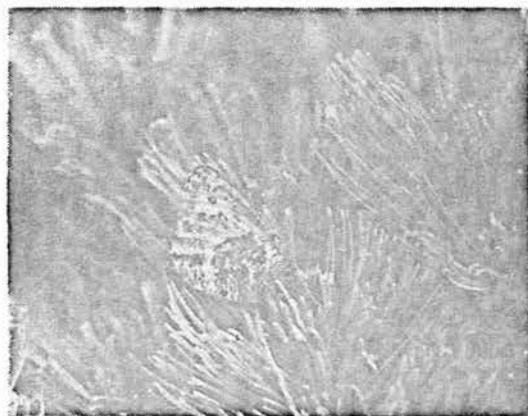
それはとにかく、この時も私はそうした予感を感じて一瞬ハッとした。その時には眼前一尺と離れない所に異様なものを認めていた。次の瞬間、それがまぎれもない高山蝶のタカネヒカゲであることを知った。それは思いもかけぬ出来事であり、夢にも予期せぬ出会いであった

というのは、時季からしても場所柄から考えても、私のこの蝶に関するそれまでのデータと余りにかけ離れていたからである。普通ではこの蝶はすでに姿を消している筈であるし、棲家としてはおらかな尾根だけを考えていたからである。私は自分がその時キレットの底に霧にとりまかれて寸時の逡巡も許されぬ切迫した事態にあるのも忘れて、眼前の小さな高山の動物の体が一面露の玉でおわれている姿に見入った。この蝶は、高山蝶の中でもとりわけ高地に棲む種だけに毛深いのである。その身を高所の寒気から守る筈の絨毛に今は一面真珠のような露の玉を飾りつけていたのであった。

重く湿った山の霧は、この蝶はかりか、そのテラスに根を張ったハイマツの葉にも、岩壁を彩る地衣にも、一様に露の玉を光らしている。そればかりではない、私のヤッケからもいつの時にか雫がたれていた。飛弾側から押し上げてくる風に伴われた霧は、濃淡の縞をつくってこの鞍部に殺到し、異様な叫びをあげて乗越していく。その度にハイマツの露が飛び散り、真珠を飾った翅がおののき揺れる。私はその風情つまされて、風をさえぎるように手を近づけたが、身動きさえしない。

ふと不安を覚えて指を軽く触れてみたが、それでも動こうとしない。しかし、私はその固く姿勢を保っていることで却って生きていることを確認した。もともと身の軽い蝶ではあるが、この冷気の中で、しとど露にまみれては動くことはできまい。それにしても、その霧の中の高山蝶の姿は、なんと悲壯で絢爛たる美しさであったろう。

私が、傍で息子が幾度もいぶかった程に見入っていたのは、心の中でどうしたものかと決しかねていたからである。このまゝ、立ち去るのは情に於いて真にしひのないものがあつた。というのは、このおそい季節の冷たい霧の山稜におきざりにすることは見殺しと同じように思われたからである。こうした躊躇のさ中に私は更に一つ重大な発見をしてしまった。



ハイマツとタカネヒカゲ（常念乗越にて）

それは、後翅に包まれたあたりのふくらみから、それが間違いなく雌の蝶だということである。而も、豊かに卵を抱いた見事な雌のように思われたのである。この新しい発見で、直ちに私の心は決った。さて、連れていくにしてもどうしたものかと、また戸惑ったが、胸のポケットにキャラメルを残していることに気づき、その小箱におさめることにした。

その山行の帰りは、蝶ヶ岳にまわる予定であったのでそこのおらかな尾根に放つことを思い浮べたからである。

一体生態をしらべている者にとって、雌の個体はひとしお貴重な存在になっている。というのは、種族保存に繋がる必然性が一段と大きいからである。この一点からも、険しい瘦尾根に残しておくより、広々とした稜線に移してやるのが、その使命を助成する道と考えられたし仮りに、それが已婚の雌であれば無論のこと、よし、未婚のものであつたとしても、時期外れとはいえ、配偶を得る望は必ずしも絶無ではないと思われもした。

こうして、私がわくりなくも大キレットの霧の中で拾った高山の孤児は、お菓子の空箱に入り、ザックのポケットにおさまって、北麓に登り、再びキレットを越え、南岳のテントに一夜を明かした翌日、天狗原を槍沢へ下って徳沢から大滝小屋へ運ばれた。その間、私は休憩をとる度にその小さな容れ物をおそろおそろとりだしては中味の安否を点検し、新鮮な空気と光にふれさせた。そして、その翌日、無事目的地蝶ヶ岳へ伴うことができた一面のハイマツの間を、残りの花が飾っている初秋のおらかな山稜の一角、丁度大キレットを真正面に望む地点にその大切な荷を下すと、私はすぐ様同類のタカネヒカゲを求めてあたりを歩き廻った。仲間の間に放つてやりたかったからである。ところが、何時もならたやすく見付かるはずのものが皆目姿を見せぬ。私ははたと当惑したが、今更どうにもならぬ。悔痕に似た思いでその小箱を取りあげ、蓋をあけた。にわかの明るさと、爽やかな空気にさらされ、一瞬戸惑を見せたが、キレット生れの孤蝶は三日を過ぎた狭い棲家の縁にはい上り、一二度身を立て直した後どうにか自力で飛び立っていった。私は、重荷から解放された安堵の気持ちと、大きな心の支えを一つとりはづされたうら淋しい思いでその行方を見送った。その後、ふと手元に残った空箱に目を落とした時、私は思わず驚きの声をあげた。なんと、その内側にびっしり卵が生みつけられていたではないか。私はそれまでに何度も箱の中をながめていたが、ついそ卵は見えなかった。或は蝶の姿にだけ心を奪われて気付かなかつたのかもしれないし、蝶の体にかくれて見いだせなかつたのかもしれない。この残された卵群はその蝶が私に残して



いった形見のように思われてならなかったの、その小箱を大事に家へ運んだ。然し、遂に、白磁にまごうその美しい小球体は何んの変化も見せなかった。案の定、孤独の処女だったのである。

それにしても、あの霧の大キレットの孤蝶は、蝶ヶ岳に配偶を得て、私の願い通りに目出度く子孫を残し得たであろうか。もしそうであったとすれば、私は、この蝶の生

## 鹿島槍日記

記  
柏原千恵子

6月18日 (晴)

例年通り今日より冷小屋への荷上げがはじまる。大町高校山岳部、松商短大山岳部、山の会、美麻強力その他山に親しみのある知人等が、朝6時30分、私宅に集合。同行者30名、出発前、一夏事故もなく無事であります様に一杯の御神酒を乾杯。家には女ばかりが残るため父は近所よろしくお願いと云って歩き廻る。

日通の2台の車で7時出発、鹿島に向う。途中若草ゆゆる小原を経て鹿島部落に至る。車は一時停車、夏冬登山者が立ち寄りその素朴さが愛されている宿、狩野治喜衛宅に立ち寄る。酒の好きな父のために酒が出され御馳走になる。道は大沢に沿って山深く入って行く。大谷原に到達するといよいよ荷上げがはじまる。適当に自分の体力に応じて荷を選択する。高校生で5~6貫匁、強力で8~12貫匁を背負子にがちりとりつけ、山の靈気に身を引きしめ大沢の河原をスタートする。西股で中食をとり大休止。いよいよ本格的な登りになる。覚悟していたとはいえ重荷がこたえる。高千穂平に達すると待望の鹿島槍が北股谷をへたてて肩にかぶさる位近く全容を現わす、巨大なダケカバに囲まれた細道を登ること約1時間。爺ヶ岳の東西に面した斜面を横切って稜線にでると、立山の雄大な姿が目にとび込む、この眺めに誰れしもが、荷の重さも忘れしはし茫然と見とれる。

ここから冷小屋へはほんの一投足、静かなオオシラビソの林を抜けて小屋に着く。午後3時、何時もおどろくことは冬春山登山者が多かったか不潔になっている、その上屋根はアイゼン、ピッケルで穴があき窓は破られている、薪も充分使えるように置いてあるのに床板、板壁を引きはがしてある。これにはいささか腹が立った。

午後4時2人の小屋番を残して下山のため冷小屋を後にする。途中の雪渓でグリセードを楽しむ。大谷原まで1時間30分、迎えに来た車で帰宅する。

6月20日 (晴)

14名で荷上げ。荷上げも3日目頃になるとたいぶこたえて来る。ピッチが遅いのはともかく、歩行時間と休憩時間が同率で疲労が一気に現われた感がある。

今日は何時よりも帰りの時間が遅い。一昨年爺ヶ岳に墜落したジェット機の残害をさがし集めたため、それに話の花を咲かせながら……

6月21日 (小雨)

態上不可能と目されている。相隣てる両山脈の同族を交流させた事になる。もし又、そうでなかったとしたら、私の生半可な仕業が、心ならずも異境に骸をさらさせた事になる。何れにせよ、その後暫くは、この二つのパプロビリティが私の心の中で葛藤を演じて落付かなかった。今でも折にふれ、露にまみれた翅をキレットの底でふるわしていたあのタカネヒカゲの姿が思いだされるのである

今日は荷上げをやめ西股に橋をかけることになったが、晴れ間が出て来たので橋をかけながら登ってしまえと云う意見で決行する。今日で荷上げは全部終了、午後5時小屋着例年のように山の神に御神酒を上げ、アマナのカレーライスを頂戴する。

6月22日 (晴後ガス)

冷小屋まで水を揚げるため今日はエンジン・ポンプ一式が分解され扇沢より上って来た。

6月23日 (晴後曇)

冷より種池小屋行の荷物運搬、1日2往復、種池小屋に来ると博物館の人達が雷鳥の調査をしていた、お茶をのみながら6人の調査員と話しをし、私は私なりに雷鳥の知識を多少身につけ、今后小屋番をしているにつけてもお客様への話のタネができた。その日1日中雷鳥の話がはずみあわてて夕方まで。小屋修理のため大工が2人登る。

6月24日 (雨)

一部は種池小屋に荷物運搬。大雪のため冷小屋が傾き土台を入れかえる。売店等を改修する。雨の中を明治大慶大の山岳部が冷を通過する。

6月27日 (雨)

25日から大雨で今日で3日目、退屈してしまふ。小屋番だけ残り強力は下山。

6月28日 (晴)

久しぶりに、立山が全容を現わす。大工下山、小屋番6人で整理、フトン、ゴザなど外に出して1日大掃除に専念。

6月29日 (雨)

また雨、長野県内に発令された豪雨注意報を聞きながら、下の西股の橋が流れはしまいかと心配する。

6月30日 (雨)

雨がはげしく降る、小屋の受入態制もとのい、あとは雨の上のを待つのみ、しかしこゝ雨が続いたのではユウツになる。

7月1日 (雨)

山開きなれども、悪天候のため客なし、皆ガツカリしてバー「ツベタ」を開業、メニューはビール、ウイスキー、ジュースだけ、それでも皆大満悦、山の神に御神酒を上げて一日中本夏の無事を祈っていた。

(鹿島槍冷小屋)

# 白馬岳日記

— 山小屋の生活 —

長 沢 勳

×月×日

板のすき間から日がさし込んでいる。目をこすりながら急いで庭に出て見る。久しぶりに姿を現わした白馬連峯が目の前にある。

七時半、昨夜泊った馬尻小屋に別れをつけ山頂に向う。今年はじめて小屋番をするこの俺に一抹の不安が頭をかすめる。卒業したばかりのこの俺に雲上の永い生活がつとまるだろうか、しかし俺はどんなに苦しくても山はおりにないぞ……。五分程度歩いたら大雪溪を見る、冷たい風が肌にしみる。俺の前500m位の所をポッカが一人行くだけ、他に誰も見えない。歩きはじめのためか足が重い。汗が目に入る、が冷風に救われる。「カモシカノ」と云う声が前に行くポッカから聞えて来た、三号雪溪を指さしている、「カモシカだ」と思わず叫んだ。白茶色をしたカモシカがこっちを見ている、今迄何度も登ったけれどもカモシカを見たのははじめて、うれしかったまだこっちを見ている、しばらくは息をひそめてその姿に見とれていた、と、急にその姿は岩陰にかくれてしまった。何か胸の中がスツとしたような気がした。足どりも軽く山頂に向う。高山植物もその可憐な花を開かせつつある。空気がうまい。

×月×日

今日も又雨、山に来て一週間になる、登って来た日の様な眺望は全然見ることができない。ただ雨の音と乳色にぬりつぶした濃いガス。トタン屋根に吹きつける風の音だけ、気が沈む、しかし小屋の中の空気は割と明るい一語に働いている人は皆何年も山小屋生活を経験した山男達ばかりだ。明るい冗談でウツウツさを吹きとばす。今日は皆で小屋の修理、台所の天井のベニヤ板をはり替える。見違える位明るくなった、本職とて顔まげする位のわか大工ぶりだ。

今この頂上ホテルに働いているのは主任以下16人、皆親しみ易い人達だ、初めの二、三日は言葉が荒いので少々憶した、しかし日がたつにつれ親しみ深さ、心の良さにふれ、山小屋ならではの味である。山に来ると皆生身の人間にもどるのか、むき出しの人間に接することができる。下界の様々なことは雲にさえ切られてここまでとどかないのかも知れない。

×月×日

久しぶりの好天を見る、今日は土曜日、お客さんが1500人も登山中とのこと、「今日は忙しいぞ」午後1時、小屋の前に出て見ると小雪溪からお花畑とずっと人の行列が続いている。大体600人のお客を予想して仕事にとりかかる、あわただしい空気が小屋にみなぎる。午後3

時半、ムスピを握りはじめると1200個のムスピがどンドン作り上げられて行く。

午後6時夕食を出しはじめ、86人入の食堂に次から次へと食器が運ばれるそして次から次へと

人が吸い

込まれ、又出て行く。忙しい、ただ忙しい楽屋裏は戦争状態。8時、ようやく夕食が終り、ホットする、そしてこんどは小屋番の夕食、休む間もなく続いてムスピ作り主任さんもまじって大奮闘。10時半、明日の用意をはじめ。明日は早番で3時に起床しなげなければならない。急ばいで仕事をすませ、布団にもぐり込む、11時をだいぶ過ぎてている。明日時間とおりに起きれるかどうか心配だ。

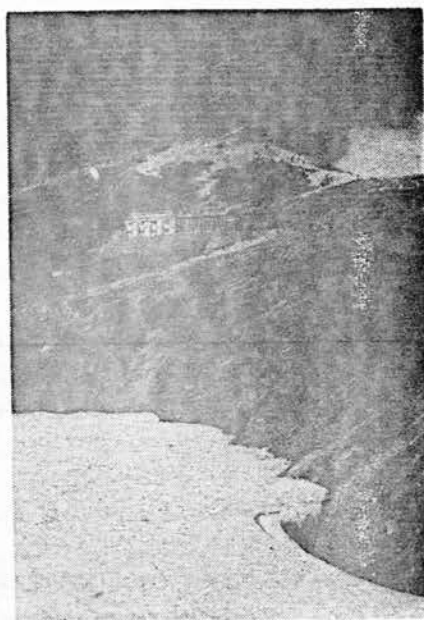
×月×日

時計を見る、2時45分、急いで身仕度をして、手さぐりで台所に行く。3時早番の人が起きて来る、おのおのの仕事にとりかかる。ねむい目をこすりこすり外の冷たい空気ですます、4時半、縦走のお客はもう食事に来るあたりが明るさを増して来る。5時半、食堂に次から次と登山者が出入りして活気を呈して来る。昨夜と同じようなあわただしさが台所に、いや小屋全体にみなぎる。7時、そろそろ朝食も終る頃だ、ホットして一服つける今日も天気は良さそうだ。屋休み、庭にて見る、富士山がかすんで見える。八ヶ岳が、浅間が雲の向うにかすんで見える。すばらしい眺めだ、この分だと明日も天気は良さそうだ。

稜線に登って見ると一段とすばらしい剣、立山、の連峯が何か話しかけるように見える。胸になにかある時、この眺めに接すると胸のものがスツ消えて行く。

高山植物もあたり一面に花を開かせている、心のやすらぎを感じつつ夕食の用意に小屋にもどる。

(白馬村営小屋番)



# チョンギリギッチョ

## 一信濃のわらべ歌小考(3)

福沢 武一

次の唱えは僕の育った上伊那中部のもの。

だれかの頭にチンチラボがとまった。そりょ取りゃ坊主。

遊び仲間のだれその頭にちょっとしたものついて  
いるのを目にとめる。藁屑とか木の葉とかいったような  
もの。えたりかしこしと嘸し立てる。それがこの唱え。  
ときには面白がって、そっとくっつけてから嘸し立てる  
「誰か」というが、「はて自分のことだろうか、他の誰  
だろう」と、とまどうところから興味がある。たがいに  
頭を眺めあって、お友達の方ならほっとし、自分も一緒  
になって嘸し立てる。自分だった場合、「そりょ取りゃ  
坊主」といわれようと、いわれまいと、とにかく取らず  
にはいられない。とり去るまでは嘸し立てるのだからす  
ぐそこえ手がいけばいいが、あべこべなところを手さぐ  
りしたりする。益々嘸し立てられること必定。

チンチラボ、——音調がとびきりいい。ある語がはじ  
めあって、音調を整えるために加工された。もとの一語  
というは、恐らくはチリ(塵)。頭韻をふんでチンチ  
リとされた。よくよくカラなことがカンカラ。よくよく  
軽いさまはカンカル。この伝。まこと小さいものをチン  
チクリンという、——これも同一構造に相違ない。更に  
母音に変化をもたせ、チンチラが生れた。ボは、「もの  
」の意のボ。一語の佳調に必要欠くべからざる音がこの  
ボ。二つのチ音を縫ってんとう音、これに全然別系統の  
ボ音を末尾に置くことによって一語は完結する。一語だ  
けで、実はもう嘸しているのがこの一語。

これを取ればなぜ坊主になるのか?……子供の僕は一  
ども考えなかった。考えたしたのは人の子の親となって  
からのこと。いま僕の到達している結論を申せば、——  
嘸し立てたのは、はじめ「誰かの頭にチンチラボがとま  
った」の反復だった。嘸し立てられたものはあちらこ  
ちら手さぐりする。自分自身の頭髪をつまんだりして。そ  
れを見てとって、すかさず嘸し続けた、——「そりょ取  
りゃ坊主」と。「それ」はまちがえられてつままれた頭  
髪だった。やがて「誰かの」から初まって、「坊主」ま  
で、一つづきに唱えられるようになった。その時、「そ  
れ」に当るものは塵に転じていった。これは、僕自身で  
言ったではおかしいが、ありそうなこと、考えられるこ  
とだ。

隣りの諏訪へいくと、いささか変わってくる。

誰かの頭へチンチク様とまった。そりょ取りゃ坊主  
(有賀氏「諏訪の民謡」)

チンチクはチンチクリンと同じもの。小さなものの意

様はボに比例する。これはまたひどく敬ったこと。上伊  
那の場合と共に、文尾は「坊主になるなよ」を省略し、  
調子のとれたところで切っている。その証明にいささか  
遠方の例をひくと、

誰かさんの頭にカンカラ虫がとまった。それを落す  
と坊主になるよ。(日本伝承 童謡集成 6群馬)  
誰がな頭さヶヶケラ坊主あがった。早く取らねど坊  
主になるよ。(同書 山形)

カンカラ虫は鰻五郎虫といい変えられても使われる。  
例は拾われ走らないけれど、一番驚かされるのは、広い  
地域にわたって趣向が同一である点。「坊主になるよ」  
とは、これは是非とも頭髪に起因しなければならない。  
国の東半分はこの系統。西国へいくと、

誰々さんの頭には、三年たってもまだ判らんのか。  
(同書 岡山)

誰々ちゃんの頭に蝶々がとまって、去年の春からま  
だ落さん。(同書 高知)

ここには坊主が影をひそめ、代って「三年たっても」  
とか、「去年の春から」とか、誇張した表現で気をひく  
ことにつとめる。

誰かさんの頭へトンボがとまった。(小山氏「小泉  
群民謡集」) 誰かの頭へ鳥が巣くんだ。小供エジ  
ルな。指でもさすな。(同書)

採集例のすくない中で貴重な東信の唱え。「巣くんだ  
」は巣くったの意か。エジルは東北信のなまりで、イジ  
ル。「指でも」は指すらの意。着想が中々面白い。方  
言が歌声に生かされている点も見落せない。こうした秀  
作が各地に多種多様うすもれているはず。その実証とし  
て、僕の現住地更埴市のもを紹介し、各方面の現地採  
集をうながす一助としたい。

誰かさんの頭にトンブリ虫ついている。取ればオボ  
になる。なな取っと。

トンブリ虫は異風な一語。小泉のトンボに直結する。  
オボは御坊で、坊主と同じもの。「なな取っと」は「取  
るな」の意。古典に「な取りを」とあるその遺香。北信  
一帯の特徴語法だ。この唱えのよさは、こうした点にも  
認められる。正直なところ、採集したどたん、ほくそえ  
んでしまった僕だった。なお、トンブリ虫の代りに、チ  
ョンコとチョンチョの形も拾われる。これは高知の蝶々  
を思いあわさせる。チョンギリギッチョの形もある。要  
すべき音調。チンチクリともいわれる。これは諏訪の例  
に近い。一地区でこのように多数変調を生んでいる。ま  
だまだこのほかにもありそうだ。(屋代東高校教諭)



## 長野県山岳連盟指導者研修会

## 針ノ木合宿に参加して

久保田 稔

長野県山岳連盟が本年4月に結成されて以来、始めての山行である指導者研修会が、7月7日から9日まで針の木岳周辺にて行われた。

当時は、県下でも伊那谷を中心に猛威を振るっていた梅雨前線が、本邦を北上したり南下したりして不安定な気候続きであったが、幸いにも合宿中は降られる事なく済んだ。とはいえ、当初県下二十山岳団体、80名余りのリーダー級の岳人が参加する予定であった本合宿も、蓋をあけてみたら15山岳団体、60名の参加者しかなかったという事実は、やはり水害等による影響のためであるといえよう。特に今回の合宿が、岳連結成以来初めての事だけに非常に残念な事であった。

本合宿の有する意義はいくつかある、私は岳連傘下の各山岳団体の技術、思想、運営等に関する認識と交流を深めることが主ではないかと思う。その点では今回の合宿は大成功であったと思う、それに何よりも大きな事はこの合宿を通じて、長野県山岳連盟が結成されたんだという実感を体験した事ではないかと思う。このことは今後の岳連発展の大きな礎となるだろう。

次に合宿の内容についてふれてみよう。

7日午前9時半に大町駅前前記15団体60名の岳人が集合、開会式が行われた。

昨夜まで降り続いた雨は嘘のように晴れあがり、立っただけでもじっとり汗ばんでくるむし暑い中を、岳連会長の古原リーダーより、「今回の合宿は研修会であって登山には重点をおいていない。大沢小屋周辺にベースキャンプを設け、晴天ならば計画に従い、荒天ならば大沢小屋にてデスクワークを行いたい。この頃は登山人口が急激に増加してきたが、リーダーの増加がそれに伴わず、遭難が相次いで起っており、遭難をなくする為にも、インスタントリーダーならぬ真のリーダーとなるために、三日間を十分に活用し成果をあげて欲しい。最後まで事故なく元気で活動する事を望む」旨の挨拶、次いで地元市役所観光課長、大町山岳博物館長、大町山の会会長より親迎挨拶と激励があり、サブリーダーより合宿中の注意、そして最後に役員紹介がなされ、開会式を終了、直ちに大町市差し廻しのバスにて大沢入口に向かった。

その日は大沢小屋上部の雪溪の末端あたりに宿営、雪溪上でアイゼン、ザイル等の基本的な訓練を行なった。

明けて8日、天候は必ずしも良好とは云えず、峠は霧

に包まれて見えなかったが、予定のコースを変更して午前7時BCを発った。パーティーは、針の木峠→蓮華岳マヤクボ→針の木岳、マヤクボの下の雪溪→スバリ岳各二班の六パーティーで、リーダー、サブリーダーは適当に本部で決定し、大町山の会員がアドバイザーとして加わった。

午後1時には全員帰幕し、2時から報告会と自己紹介を兼ねた懇親会が行われた。

自己紹介は、やはり山の好きなのはどちらかといえば変わった人が多く愉快であった。キャンプファイアーを囲みながらやればもっと楽しい雰囲気となったと思う。

最終日は、針の木雪溪、大沢、赤沢、マヤクボヘパーティーを出す予定であったが、やはり天候がすっきりせず、結局マヤクボの下の雪溪で全員雪上訓練ということになった。時間は予定通り五時出発、六時頃より訓練を開始した。内容はカッティング、グリセード、滑落停止ジッフェル、コンティニアスでの滑落停止等、また、場所をかえて、岩場の登り方、救急法等についても研修を行い、一般の登山者がぼつぼつ姿を見せ始める10時頃訓練を切りあげ、テントの撤収を開始した。

午後2時バスへ乗車前に閉会式と記念撮影を行い、第一回合宿を終った。

技術面についての感じた事を述べるならば各山岳団体の間に実力の差が相当見受けられた。雪に対しては優秀な力を有するが、岩に対しては弱く、またはその逆であるとか、あるいはまた基礎的な面から訓練をつまねばならぬと思われるパーティー等、生活技術、パーティーシップ、リーダーシップ等の面においても同じ事がいえるこれらの事はこれから大きく発展する余地が大であるということで岳連に課せられた大きな任務であろう。

(大町山の会)

## お願い

夏山シーズンの訪れた北アルプスは美しい岩肌を現わしております。読者の皆様方の「山と博物館」に対するご要望、ご批評ご投稿をお待ちいたしております。

なお資料(山岳会機関紙、研究報告等)交換は長野県大町山岳博物館宛ご送付下さい。「山と博物館」をご送付申し上げます。

## 博物館だより

八方尾根日帰り登山は7月2日行なわれた。昨日まで降り続いた雨も当日はカラリと晴れ上り、小学生を混えた30数名は残雪を輝やかせる白馬三山を眺め楽しい1日を過した。

山の自然科学教室は今年で5回を数える。東京都下の中学生200名が参加して行なわれる。

7月25日、博物館見学、居谷里湿原観察、26日、細野より黒菱小屋まで観察登山、27日、八方池まで登山、28日帰京  
針ノ木日帰り市民登山は7月30日行なわれる。大町駅



八方尾根登山

### 資料寄贈

Nature Study No7.5 大阪市立自然科学博物館、四つばしNo2.4大阪市立電気学科館、ふみあとNo7昭和電工大町工場山岳部、佐賀県文化館の葉 佐賀県文化館、モンキーNo41日本モンキーセンター、OMCレポート 奥多摩山岳会、まどのゆきNo42 積雪科学館、金沢文庫研究 No66金沢文庫、会報61-5登歩溪流会、わらじNo43 わらじの仲間、山口県の自然 No5山口県立山口博物館、樺火No291~292 山小屋クラブ、和の植物 横内齊、ハイカーNo68山と溪谷No268 山と溪谷社、自然保護No4 日本自然保護協会、葛城No133 泉州山岳会、後友No42 東京北稜山岳会、探検No3 京大探検部、OMCレポート No133 奥多摩山岳会、登攀No256~257 東京緑山岳会、山嶺No372~374 東京野歩路会、山毛櫨林No60 広島山の会、山No346~347 横浜山岳会、京都山岳61-6 京都山岳会、岳友No60 岳友クラブ、奥那須の山と谷 わらじの仲間 地質ニュースNo8 地質調査所、私たちの自然No4、5日本

お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料200円(郵送料とも)を現金書留または郵便替為、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。  
大町山岳博物館

6時30分の貸切バスで向い大雪溪の涼風にあたりながら登り針ノ木岳、蓮華岳の頂上に立ち、山の空気を満喫しようというもの、会費は200円、申し込みは山岳博物館公民館、各支所となっております。

鳥類標識調査は連日調査員によって行なわれている。これは全国10カ所に基点を定め夏鳥の足にカンをはめてどのような渡りをするか調べるもので、国際的な調査が行なわれようとしている。

高松宮殿下夫妻秩父宮妃殿下は6月15日山岳博物館を訪れた。当日は天候が良く雄大なアルプスの姿が遠く白馬三山まで望まれ、さかんにカメラのシャッターを切っておられた。



高松宮妃(左)と秩父宮妃

鳥類保護連盟、館報No5、1大阪自然科学博物館、(敬称略)

6巻7号正誤表2頁

左下9行 3777m-3776m

3頁

右上6行20°C-12°C 2°C-12°C

右下10行番一審

右下7行瓜一爪

山と博物館 第6巻第8号 1961年7月25日発行

発行所 長野県大町市TEL(大町)211

大町山岳博物館

印刷所 大町市上中町

信州印刷大町工場